



TITLE:

弱双曲系に対するある注意 (偏微分方程式の解の構造の研究)

AUTHOR(S):

多羅間, 茂雄

CITATION:

多羅間, 茂雄. 弱双曲系に対するある注意 (偏微分方程式の解の構造の研究). 数理解析研究所講究録 1980, 376: 22-38

ISSUE DATE:

1980-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/104755>

RIGHT:

弱双曲系に対するある注意

京大 エ 多羅間 茂雄

I. 序 弱双曲系に対する非特性初期値問題を考える。
特性根の重複度一定の場合の単独の双曲型方程式の初期値問題については、 C^∞ -well posed になるための条件が知られている。一方 system の場合に、特性根の重複度一定の仮定の下で、 C^∞ -well posed になるための条件を求める問題に関し多くの研究があるが、単独方程式の場合と異なり、特性根の重複度が一定であっても作用素の主要部の行列としての構造は必ずしも安定していない、このために、一般的に単独方程式の場合と同じ様には、 C^∞ -well posed になるための条件を簡潔に表わすことはまだ出来ていない。(以上のことについては W. Matsumoto [1] 参照) 本報告では、同様の問題を函数空間が Gevrey class の場合に考え、そこでの well posed になるための条件を考察する。尚この様に Gevrey class で考えることは、W. Matsumoto [1] で与えられた、 C^∞ -well posed ではないが、指数がある一

定の値以上の γ の Gevrey class 上で well posed になる例に由来する。

II 定義と結果 $T > 0$ とし, $\Omega = [0, T] \times \mathbb{R}_x^n$ とする。 $S > 1$

に対し, $\gamma^{(S)}(\Omega) \ni f$ とは i) $f \in C^\infty(\Omega)$ かつ ii)

任意のコンパクト集合 $K \subset \Omega$ に対し定数 $A > 0$ が定まり

任意の $\alpha \in \mathbb{N}^{n+1}$ に対し $|D^\alpha f(x)| \leq A^{1+|\alpha|} |\alpha|!^S \quad x \in K$

が成立つ, この i) ii) が満足されることをとする。ここで

$\alpha = (\alpha_0, \dots, \alpha_n)$ とする時 $|\alpha| = \sum_{i=0}^n |\alpha_i|$, $D^\alpha = D_t^{\alpha_0} D_{x_1}^{\alpha_1} \dots D_{x_n}^{\alpha_n}$,

$D_{x_k} = -\frac{1}{i} \frac{\partial}{\partial x_k}$ とする。

さて $m \times m$ system $P = D_t - \sum_{i=1}^n A_i(t, x) D_{x_i} + B(t, x)$

を考える。この P に対し次の仮定をする。

[H-0] $\varphi(t, x, \xi) \equiv \det \left(\tau I_m - \sum_{i=1}^n A_i(t, x) \xi_i \right)$ とし

$(t, x, \xi) \in \Omega \times \mathbb{R}_{\xi}^n \setminus 0$ に対し

$$\varphi(t, x, \xi) = \prod_{i=1}^l (\tau - \lambda_i(t, x, \xi))^2 \prod_{j=l+1}^{m-l} (\tau - \lambda_j(t, x, \xi))$$

と分解出来, λ_i は実数値函数で $i \neq j$ の時 $\lambda_i \neq \lambda_j$ である。

[H-S₀] ($S_0 > 1$)

$A_i(t, x)$, $B(t, x)$ の各成分が $\gamma^{(S_0)}(\Omega)$ の元であり,

$A_i(t, x)$ の各成分は Ω 上で有界である。

作用素 P に対し次の初期値問題

$$[C] \begin{cases} Pu = f & \text{in } \Omega \\ u(0, x) = \varphi(x) & \text{on } \mathbb{R}^n \end{cases} \quad \text{を考える。}$$

定義. 初期値問題 $[C]$ が $\gamma^{(s)}$ -well posed とは.

i) 任意の $f \in \gamma^{(s)}(\Omega)$ と 任意の $g \in \gamma^{(s)}(\mathbb{R}^n)$ に対し $[C]$ の解 $u \in \gamma^{(s)}(\Omega)$ が存在する。

ii) $u \in C^1(\Omega)$ で

$$\begin{cases} Pu = 0 & \text{in } \Omega \\ u(0, x) = 0 & \text{on } \mathbb{R}^n \end{cases} \quad \text{であれば, } \Omega \text{ で}$$

$$u = 0 \text{ となる。}$$

この i) ii) が成立することとする。

次に行列 L を

$$L(t, x, \tau, \xi) \equiv {}^{\omega}P_t P_s {}^{\omega}P_t + \frac{1}{2} {}^{\omega}P_t \{P_t, {}^{\omega}P_t\} \quad \text{で定義する。}$$

$$\text{ここで } P_t = I_m \tau - \sum_{i=1}^m A_i \xi_i, \quad P_s = B - \frac{1}{2} \sum_{i=1}^m \frac{\partial}{\partial \xi_i} D_{x_i} P_t,$$

$${}^{\omega}P_t: P_t \text{ の余因子行列, } \{P_t, {}^{\omega}P_t\} = \frac{\partial}{\partial \tau} P_t D_t {}^{\omega}P_t - D_t P_t \frac{\partial}{\partial \tau} {}^{\omega}P_t$$

$$+ \sum_{i=1}^m \left(\frac{\partial}{\partial \xi_i} P_t D_{x_i} {}^{\omega}P_t - D_{x_i} P_t \frac{\partial}{\partial \xi_i} {}^{\omega}P_t \right) \text{ とする。}$$

定理 作用素 P が条件 $[H.0]$, $[H.S_0]$ を満足して 1) とする。この時

$$[L] \quad L_j = L(t, x, \lambda_j, \xi) = 0 \quad j=1, \dots, l, \quad (t, x, \xi) \in \Omega \times \mathbb{R}_+^n \setminus 0$$

であれば、初期値問題 $[C]$ は $S \geq S_0$ に対し、 $\gamma^{(S)}$ -well posed である。

注意 1. Y. Ohya [3] によれば、 $S_0 < 2$ である時、条件 $[L]$ がなくても、 $S_0 \leq S < 2$ では、 $\gamma^{(S)}$ -well posed になる。

2. 係数が C^∞ の時、様に C^∞ -well posed であるための必要条件が条件 $[L]$ であり、更に $\text{rank} [I_m \lambda_i - \sum A_j p_j]$ が一定であれば、条件 $[L]$ は C^∞ -well posed のための十分条件にもなる。 (H. Yamahara [4] 等による。)

3. Gevrey class の範囲で考える場合に、条件 $[L]$ を置く必要性に関しては、W. Matsumoto [1] 参照。

4. ${}^{co}P_i|_{\tau=\lambda_j} \neq 0$ となるのは $\text{rank} (I_m \lambda_j - \sum A_i p_i) = n-1$ の時だけである。

III 定理の証明 以下 P は $[H-0]$, $[H-S_0]$ $[L]$ を満足しているとする。

$p(t, x, \xi) \in L_S^K$ とは i) $p \in C^\infty(\mathbb{R} \times \mathbb{R}^n \times \mathbb{R}^n \setminus \{0\})$,

ii) ξ に関して K 次の斉次函数 iii) 任意のコンパクト集合 $K \subset \mathbb{R}^n$ と任意の $\beta \in \mathbb{N}^n$ とに対し定数 $A > 0$ が定まり、

任意の $d \in \mathbb{N}^{n+1}$ と $x \in K$ に対し $|D^d \partial_\xi^\beta p(x, \xi)| \leq A^{(|d|+|\beta|)} |d|!$ が成立つ。
これら i), ii), iii) が満足されることをする。

P の特性根 λ_i は L_{s_0}' の元である。

$PS(m, s_0) \ni P(t, x, D_x)$ とは t を parameter とし
 x 持つ R_x^m 上の擬微分作用素で P の symbol $p(t, x, \xi)$ が

$$1) \quad p(t, x, \xi) \in C^\infty(\Omega \times R_x^m)$$

2) 任意の $\beta \in N^m$ に対し 定数 A があって, 任意の $\alpha \in N^{n+1}$

と $(t, x, \xi) \in \Omega \times R_x^m$ に対し

$$|D^\alpha \partial_\xi^\beta p(t, x, \xi)| \leq A^{1+|\alpha|} |\alpha|!^{s_0} (1+|\xi|)^{m-|\beta|}$$

が成立する。

この 1), 2) を 満足するものとする。

§1 条件 [L] について.

[H-0] より, 行列 $A = \sum_{i=1}^m A_i(t, x) \xi_i$ の固有値は λ_i ($i=1 \dots m-l$)
 である。 Q_i^0 で固有値 λ_j に対する一般化固有空間への射影
 とする。この時 $Q_i^0 \in L_{s_0}^0$ となる。この Q_i^0 を用いて, 条件 [L]
 を書いてみる。

$$P_l = \tau I_m - A$$

$$= \sum_{j=1}^{m-l} (\tau - \lambda_j) Q_j^0 + \sum_{j=1}^l (\lambda_j - A) Q_j^0$$

$${}^\infty P_l = \sum_{j=1}^l g_j(\tau) \{ (\tau - \lambda_j) - (\lambda_j - A) \} Q_j^0 + \sum_{i=l+1}^{m-l} h_i(\tau) Q_i^0$$

となる。ここで

$$g_i(\tau) = \prod_{\substack{j=1 \\ j \neq i}}^l (\tau - \lambda_j)^2 \prod_{k=l+1}^{m-l} (\tau - \lambda_k) \quad i=1 \dots l$$

$$h_i(\tau) = \prod_{j=1}^l (\tau - \lambda_j)^2 \prod_{\substack{k=l \\ k \neq i}}^{m-l} (\tau - \lambda_k) \quad i=l+1 \dots m-l$$

補題 1-1 $k=1, \dots, \ell$ に対し

$$\begin{aligned} & {}^{\infty}P_1 \{P_1, {}^{\infty}P_1\} / \tau = \lambda_k \\ &= 2 g_k^2(\lambda_k) (A - \lambda_k) Q_k^0 \{(\tau - \lambda_k) I_m, (A - \lambda_k)\} Q_k^0 \\ &+ g_k^2(\lambda_k) (A - \lambda_k) Q_k^0 \sum_{i \neq k} (\lambda_k - \lambda_i) \{Q_i^0, Q_k^0\} (A - \lambda_k) Q_k^0 \\ &+ g_k^2(\lambda_k) (A - \lambda_k) Q_k^0 \sum_{\substack{i \neq k \\ 1 \leq i \leq \ell}} \{(\lambda_i - A) Q_i^0, Q_k^0\} (A - \lambda_k) Q_k^0 \end{aligned}$$

このとき $Q_k^0 Q_j^0 = \delta_{kj} Q_j^0$, $(A - \lambda_k)^2 Q_k^0 = 0$,
 $(A - \lambda_k) Q_k^0 \{ (A - \lambda_k) Q_k^0, (A - \lambda_k) Q_k^0 \} = 0$ に注意すれば $\{ \cdot, \cdot \}$ の
 定義から得られる。

系 1-2

$$O_1 = \tau I_m - \sum_{i=1}^{m-\ell} \{ \lambda_i Q_i^0 + (\lambda_i - A) Q_i^0 \} \quad \text{とす。}$$

$k=1, 2, \dots, \ell$ に対し

$$\begin{aligned} & {}^{\infty}O_1 \{O_1, {}^{\infty}O_1\} / \tau = \lambda_k - {}^{\infty}P_1 \{P_1, {}^{\infty}P_1\} / \tau = \lambda_k \\ &= -2 g_k^2(\lambda_k) (A - \lambda_k) Q_k^0 \sum_{\substack{i \neq k \\ 1 \leq i \leq \ell}} \{(\lambda_i - A) Q_i^0, Q_k^0\} (A - \lambda_k) Q_k^0 \end{aligned}$$

と存す。

$$\text{これは } {}^{\infty}Q_1 = \sum_{j=1}^{\ell} g_j(\tau) \{(\tau - \lambda_j) + (\lambda_j - A)\} Q_j^0 + \sum_{j=\ell+1}^{m-\ell}$$

$h_j(\tau) Q_j^0$ と存す。補題 1-1 とから得られる。

補題 1-1 と系 1-2 とから.

補題 1-3 $L_{S_0}^0$ の元 O_0 を

$$O_0 = B + \frac{1}{2} \sum_{i=1}^m \partial \varphi_i D x_i (P - O_1) \\ + \sum_{k=1}^l g_k^2 (\lambda_k) Q_k^0 \sum_{\substack{i \neq k \\ 1 \leq i \leq m-l}} \{ (\alpha_i - A) Q_i^0, Q_k^0 \} Q_k^0$$

とすれば,

$O_1 + O_0$ は条件 [L] を満足する.

注意 スカラー函数 $\alpha \in \mathcal{Y}^{(s_0)}(\mathbb{R})$ に対して.

$\alpha P + (1-\alpha)(O_1 + O_0)$ も条件 [L] を満足する. 特に

$\frac{1}{2}P + \frac{1}{2}(O_1 + O_0)$ とすると, Σ の主要部は $I_m \tau - \sum_{i=1}^{m-l} \lambda_i P_i$ であり, 対称化可能である.

上の注意から, 任意の正の数 $R > 0$ に対し, $\tilde{P} = D_t + \tilde{A}(t, x, D)$ ($\tilde{A} \in PS(1, S_0)$) があり, $\tilde{A}(t, x, D)$ の symbol を

$\tilde{a}(t, x, \xi)$ とする時, $|x| < R$ で, $\tilde{a}(t, x, \xi) = -A + B$.

即ち, $|x| < R$ で $\tilde{P} = P$, 更に, $\tilde{a}(t, x, \xi) \sim \sum_{j=0}^{\infty} a_j$

$a_j \in L_{S_0}^{1-j}$ と漸近和に書けて, $\tau + a_1 + a_0$ は, 条件

[H-0] と [L] とを満足する. $\tau(2|x| > 2R)$ は

$\tilde{a}(t, x, \xi)$ は ξ のみの函数となる. 以上の性質を満足するものが取れる.

P の形式的共役 P^* に対しても [H-0] [H- s_0], [L] が満たされ,
更に, 条件 [L] が Holmgren 変換に対し不変であることから, 定
理を証明するには, 上で述べた \tilde{P} に対する初期値問題で,
初期値が $\gamma^{(s)} \cap \Sigma'$ となるものに対する解が $\gamma^{(s)}(\mathbb{R})$ で存在
することを示せば十分である。

以下では \tilde{P} を改めて P と書く。この時次の命題が成立
する。

命題 1-5 任意の $k=1, 2, 3, \dots$ に対し, 作用素 \tilde{O}_k

$$\tilde{O}_k = D_t^{2^{k-1}-1} + \sum_{j=1}^{2^{k-1}-1} A_j(t, x, D_x) D_t^{2^{k-1}-1-j}$$

があり,

$$P \tilde{O}_k = \Lambda^{2^{k-1}} + \sum_{j=1}^{2^{k-1}-1} B_j(t, x, D_x) \Lambda^{2^{k-1}-j}$$

となる。

$$\text{ここで } A_j \in PS(j, s_0)$$

$$B_j \in PS(0, s_0) \quad j=1 \dots k-1$$

$$B_j \in PS(1, s_0) \quad j \geq k$$

$$\Lambda = D_t - \sum_{j=1}^{m-2} \lambda_j P_j(t, x, D_x) + \alpha$$

$$\alpha \in PS(0, s_0)$$

任意の $f \in \gamma^{(s)}(\mathbb{R}) \cap \Sigma'$ $s_0 \leq s$ に対し, 方程式

$$\begin{cases} Pu = f \\ u(0, x) = 0 \end{cases} \quad \text{は}$$

$$u = \tilde{O}_K v \text{ とすると}$$

$$\begin{cases} P \tilde{Q}_K v = f \\ D_t^i v(0, x) = 0 \quad i=0, 1, \dots, 2^{k-1}-1 \end{cases} \text{ の解を求めることに}$$

なるが、命題 1-5 より、 Λ は L_2 well posed な作用素であることに注意すれば、 $k > 5$ とする k を取れば、解 $v \in \mathcal{D}^{(5)}$ が存在することがわかる。(Y. Ohya [3])

§2. 命題 1-5 の証明

先ず、記号を導入する。

$a_j \in L_{s_0}^{n-j}$ に対する形式和 $A = \sum_{j=0}^{\infty} a_j$ の集合を $\tilde{L}_{s_0}^n$ で表し

$(A)_j \equiv a_j$ とする。

$$A^i \in \tilde{L}_{s_0}^{n_i} \quad A^i = \sum_{j=0}^{\infty} a_j^i \quad i=1, 2 \text{ に対し}$$

$$A^1 \circ A^2 \in \tilde{L}_{s_0}^{n_1+n_2} \text{ を}$$

$$A^1 \circ A^2 = \sum_{j=0}^{\infty} C_j \quad C_j = \sum_{l+m+|d|=j} \frac{1}{d!} \partial_x^d a_l^1 D_x^d a_m^2$$

と定義する。

$$\tilde{L}_{s_0} = \bigcup_{n=0, \pm 1, \dots} \tilde{L}_{s_0}^n$$

$\tilde{L}^n[\tau] \subset \tilde{L}_{s_0}^n$ の元を係数とする n 次多項式全体を表わす。 $\tilde{L}[\tau] = \bigcup_{n=0, \pm 1, \dots} \tilde{L}^n[\tau]$

$$\alpha_i \in \tilde{L}^{n_i}[\tau] \quad \alpha_i = \sum_{j=0}^{n_i} A_j^i \tau^{n_i-j} \quad i=1, 2$$

に対し、 $\alpha_1 \circ \alpha_2 \in \tilde{L}^{n_1+n_2}[\tau]$ を

$$\alpha_1 \circ \alpha_2 = \sum_{j=0}^{n_1+n_2} B_j \tau^{n_1+n_2-j}$$

$$B_j = \sum_{l+s+m=j} \binom{m-1}{s} A_l' \circ D_t^s A_m^2 \quad \text{と定義する。}$$

$$\text{ここで } D_t^s A_m^2 = \sum_{j=0}^{\infty} D_t^s (A_m^2)_j \quad \text{とする。}$$

この § では、 P は \mathbb{C}^n の P に対し系 1-3 で定義された $O = O_1 + O_2$ を $\tilde{L}'[T]$ の元と見る。即ち $P = I_m T + A$

$A \in \tilde{L}'$ であり、 $-(A)_0$ は $[H, 0]$ を満足し、 $P_1 = I_m T + (A)_0$

$P_0 = (A)_1$ とし $[L]$ を満足する。

$Q_i^0 \in L_{s_0}^0$ を $-(A)_0$ の固有値 λ_i に対する一般化固有空間への射影とする。この時次の補題が成立する。

補題 2-1

$Q_i \in \tilde{L}_{s_0}^0$ で次を満たすものがある。 ($i=1 \dots m-l$)

$$(Q_i)_0 = Q_i^0$$

$$Q_i \circ Q_j = 0 \quad i \neq j$$

$$Q_i \circ Q_i = Q_i, \quad \sum_{i=1}^{m-l} Q_i = I.$$

補題 2-2 (上の Q_i を用いた P の block 対角化)

$M, N \in \tilde{L}_{s_0}^{-1}$ があつて

$$(I+M) \circ (I+N) = I \quad \text{で、}$$

$$\tilde{P} = (I+M) \circ P \circ (I+N) \quad \text{とする。}$$

$$Q_i \circ \tilde{P} \circ Q_j = 0 \quad i \neq j \quad \text{となる。}$$

注意 $0 = 0_1 + 0_0$ に対しても $\tilde{M}, \tilde{N} \in \tilde{L}_{s_0}^0$ が取れて, 補題 2-2 の主張が成立する。

$$\tilde{Q} = (I + \tilde{M}) \circ Q \circ (I + \tilde{N}) \text{ とする。}$$

$$\tilde{R} = \frac{1}{2}(\tilde{P} + \tilde{Q})$$

$$\tilde{P}_1 = \tilde{P}, \quad \tilde{Q}_1 = \tilde{Q} \quad \text{と}$$

$$s \geq 2 \text{ に対し} \quad \tilde{P}_s = \tilde{P}_{s-1} \circ \tilde{Q}_{s-1}, \quad \tilde{Q}_s = 2\tilde{R}^{2^{s-1}} - \tilde{P}_s \text{ と}$$

順次 \tilde{P}_s, \tilde{Q}_s を定義する。この時

補題 2-3

$$\tilde{P}_s = \tilde{R}^{2^{s-1}} + \sum_{j=1}^{2^{s-1}} A_j \circ \tilde{R}^{2^{s-1}-j}$$

$$A_j \in \tilde{L}_{s_0}^0 \quad j=1, \dots, s-1$$

$$A_j \in \tilde{L}_{s_0}' \quad j=s, \dots, 2^{s-1}$$

この証明は §3 で与える。

系 2-4. $s=1, 2, 3, \dots$ とする。

$$P \text{ に対し } R_s \in \tilde{L}_{s_0}^{2^{s-1}-1} \text{ 【2】 が取れ}$$

$$P \circ R_s = \tilde{R}^{2^{s-1}} + \sum_{j=0}^{2^{s-1}} B_j \circ \tilde{R}^{2^{s-1}-j}$$

$$B_j \in \tilde{L}_{s_0}^0 \quad j=1, \dots, s-1$$

$$B_j \in \tilde{L}_{s_0}' \quad j=s, \dots, 2^{s-1}$$

$$\therefore \tilde{R} = (I + N) \circ \tilde{R} \circ (I + M)$$

このことは、補題 2-3 と $\tilde{P}_S = \tilde{P} \circ \tilde{Q}_1 \circ \dots \circ \tilde{Q}_{S-1}$ と、
 $(I+N) \circ \tilde{P} \circ (I+M) = P$ とから、明らか。

系 2-4 より 命題 1-5 が従った。

§3 補題 2-3 の証明

補題 2-1 の Q_i , $i=1, \dots, m-l \in \hat{L}_{S_0}^0$ に対し、

$$Q_i = [b_i^1 \dots b_i^n] = \begin{bmatrix} C_i^1 \\ C_i^n \end{bmatrix} \quad \text{と置く。}$$

b_i^s : $n \times 1$ vector, C_i^s : $1 \times n$ vector

各 $(t_0, x_0, y_0) \in \mathbb{R} \times \mathbb{R}_y^n \setminus 0$ に対し (t_0, x_0, y_0) の 錐近傍 V が
 取れて、 $\varepsilon > 0$ は、

$$b_1^{n_1}, b_1^{n_1'}, b_2^{n_2}, b_2^{n_2'} \dots b_l^{n_l}, b_l^{n_l'}, b_{l+1}^{n_{l+1}} \dots b_{m-l}^{n_{m-l}} \\
C_1^{k_1}, C_1^{k_1'}, C_2^{k_2}, C_2^{k_2'} \dots C_l^{k_l}, C_l^{k_l'}, C_{l+1}^{k_{l+1}} \dots C_{m-l}^{k_{m-l}}$$

が取れて、

$$E = [b_1^{n_1} b_1^{n_1'} \dots b_{m-l}^{n_{m-l}}] \quad \text{とした時、}$$

$(E)_0$ は V で正則。

$$F = {}^t [{}^t C_1^{k_1}, {}^t C_1^{k_1'} \dots {}^t C_{m-l}^{k_{m-l}}] \quad \neq.$$

$(F)_0$ が V で正則。

となる様に出来る。

この時 Q_i の性質より

$$F \circ E = \begin{pmatrix} A_1 & & \\ & A_2 & \\ & & \ddots \\ & & & A_{m-l} \end{pmatrix}$$

$$A_i \in \tilde{L}_{S_0}^0$$

$$A_i \quad (i=1 \dots l) \quad 2 \times 2 \text{ 行列},$$

$$A_i \quad (i=l+1 \dots m-l) \quad \text{スカラー}$$

となる。

更に $\exists B_i \in \tilde{L}_{S_0}^0$ があて $\forall z''$

$$\begin{pmatrix} B_1 & & \\ & \ddots & \\ & & B_{m-l} \end{pmatrix} \circ F \circ E = I_m \quad \text{となる。}$$

補題 2-2 より $\forall z''$

$$\begin{pmatrix} B_1 & & \\ & \ddots & \\ & & B_{m-l} \end{pmatrix} \circ F \circ \tilde{P} \circ E = \begin{pmatrix} p_1 & & \\ & \ddots & \\ & & p_{m-l} \end{pmatrix}$$

$$\begin{pmatrix} B_1 & & \\ & \ddots & \\ & & B_{m-l} \end{pmatrix} \circ F \circ \tilde{Q} \circ E = \begin{pmatrix} q_1 & & \\ & \ddots & \\ & & q_{m-l} \end{pmatrix}$$

$j=1 \dots l$ の時

$$p_j = \tau - \begin{pmatrix} \lambda_j & 0 \\ 0 & \lambda_j \end{pmatrix} + \alpha_i^j + d_0^j + \dots$$

$$q_j = \tau - \begin{pmatrix} \lambda_j & 0 \\ 0 & \lambda_j \end{pmatrix} - \alpha_i^j + \tilde{\alpha}_0^j + \dots$$

$$\alpha_i^j \in L_{S_0}'$$

$$d_k^j, \tilde{\alpha}_k^j \in L_{S_0}^{+k}$$

$$(\alpha_i^j)^2 = 0$$

となる。

このことは

$$\tilde{P} = \tau I_m + \sum_{i=1}^{m-l} (-\lambda_i) Q_i^0 + \sum_{i=1}^l ((A)_0 + \lambda_i) Q_i^0 + p_0$$

$$p_0 \in \tilde{L}_{s_0}^0$$

$$\tilde{Q} = \tau I_m + \sum_{i=1}^{m-l} (-\lambda_i) Q_i^0 - \sum_{i=1}^l ((A)_0 + \lambda_i) Q_i^0 + q_0$$

$$q_0 \in \tilde{L}_{s_0}^0$$

$$\tau \cdot ((A)_0 + \lambda_i) Q_i^0 = 0 \quad \text{となることから言える。}$$

$j = l+1 \dots m-l$ に対しては $\forall \tau$

$$p_j = \tau - \lambda_j + \alpha_0^j + \alpha_{-1}^j + \dots$$

$$q_j = \tau - \lambda_j + \tilde{\alpha}_0^j + \tilde{\alpha}_{-1}^j + \dots$$

$$\alpha_k^j, \tilde{\alpha}_k^j \in L_{s_0}^{+k}$$

以下では錐近傍 V 上でのみ考える。

P 及び Q は条件 $[L]$ を満足するが、この時一般に

$$A, B \in \tilde{L}_{s_0}^0 \quad \text{で} \quad A \circ B = I \quad \text{となるものに対し、}$$

$$A \circ P \circ B, \quad A \circ Q \circ B \quad \text{も条件} [L] \text{ を満足する。}$$

このことから、 $j = 1 \dots l$ に対し

p_j 、及び q_j が条件 $[L]$ を満足する。即ち

$$(p_j)_1 = \tau - (\lambda_j^0 \lambda_j^0) + \alpha_1^j$$

$$(p_j)_0 = \alpha_0^j \quad \text{と} \quad \text{して}$$

$$\omega(p_j)_1, \omega(p_j)_s, \omega(p_j)_1 + \frac{1}{2} \omega(p_j)_1, \left\{ (p_j)_1, \omega(p_j)_1 \right\} /_{\tau=\lambda_j} = 0$$

\tilde{R} の定義より

$$\begin{aligned} \begin{pmatrix} B_1 & & \\ & \ddots & \\ & & B_{m-l} \end{pmatrix} \circ F \circ \tilde{R} \circ E &= \begin{pmatrix} r_1 & & \\ & \ddots & \\ & & r_{m-l} \end{pmatrix} \\ &= T - \begin{pmatrix} \lambda_1 & & \\ & \ddots & \\ & & \lambda_{m-l} \end{pmatrix} + R' \\ R' &\in \tilde{L}_s^0 \end{aligned}$$

$$r_j = \frac{1}{2}(p_j + q_j)$$

一般に $s = 1, 2, \dots$ に対し

$$\begin{aligned} \begin{pmatrix} B_1 & & \\ & \ddots & \\ & & B_{m-l} \end{pmatrix} \circ F \circ \tilde{P}_s \circ E &= \begin{pmatrix} \tilde{p}_1^s & & \\ & \ddots & \\ & & \tilde{p}_{m-l}^s \end{pmatrix} \\ \begin{pmatrix} B_1 & & \\ & \ddots & \\ & & B_{m-l} \end{pmatrix} \circ F \circ \tilde{Q}_s \circ E &= \begin{pmatrix} \tilde{q}_1^s & & \\ & \ddots & \\ & & \tilde{q}_{m-l}^s \end{pmatrix} \end{aligned}$$

となるが、

$$\tilde{p}_i^1 = p_i, \quad \tilde{q}_i^1 = q_i$$

$$\tilde{p}_i^s = \tilde{p}_i^{s-1} \circ \tilde{q}_i^{s-1}, \quad \tilde{q}_i^s = 2r_i^{2^{s-1}} - \tilde{p}_i^s$$

となること、 \tilde{P}_s, \tilde{Q}_s の定義からわかる。

この時、

補題 3-1

$$\tilde{p}_j^s = r_j^{2^{s-1}} + \sum_{k=1}^{2^{s-1}} \delta_k \circ (r_j)^{2^{s-1}-k}$$

$$\delta_k \in \tilde{L}_s^0, \quad k = 1, \dots, 2^{s-1},$$

$$\delta_k \in \tilde{L}_{s_0}^1 \quad k = s_1, \dots, 2^{s-1}.$$

となる。 $\bar{j} = l+1, \dots, m-l$ に対して補題 3-1 が成立するのは明らか。補題 2-3 は補題 3-1 から従う。

$$p_j = \tau - \begin{pmatrix} \lambda_j^0 & 0 \\ 0 & \lambda_j \end{pmatrix} + \alpha_j^{\bar{j}} + \dots$$

$$\alpha_j^{\bar{j}^2} = 0 \quad \text{である。}$$

$$V' = \{ (t, x, y) \in V : \alpha_j^{\bar{j}}(t, x, y) \neq 0 \} \text{ とする。}$$

$$(t_0, x_0, y_0) \in V' \text{ に対し } \Sigma \text{ の全近傍 } \Sigma'', G, H \in \tilde{L}_{s_0}^0$$

が取られて、 $G \circ H = I$ である、

$$G \circ p_j \circ H = \tau - \begin{pmatrix} \lambda_j^0 & \alpha_j^{\bar{j}} \\ 0 & \lambda_j \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} p_{11}^0 & p_{12}^0 \\ 0 & p_{22}^0 \end{pmatrix} + p^{-1}$$

$$G \circ q_j \circ H = \tau - \begin{pmatrix} \lambda_j^0 & -\alpha_j^{\bar{j}} \\ 0 & \lambda_j \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} q_{11}^0 & q_{12}^0 \\ 0 & q_{22}^0 \end{pmatrix} + q^{-1}$$

$$G \circ r_j \circ H = \tau - \begin{pmatrix} \lambda_j^0 & 0 \\ 0 & \lambda_j \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} r_{11}^0 & r_{12}^0 \\ 0 & r_{22}^0 \end{pmatrix} + r^{-1}$$

$$p_{ij}^0, q_{ij}^0, r_{ij}^0 \in L_{s_0}^0$$

$$p^{-1}, q^{-1}, r^{-1} \in \tilde{L}_{s_0}^{-1} \quad \text{となる。}$$

これが条件 [L] の言い換えである。(H. Yamahara [4])

また $(t_0, x_0, y_0) \notin V'$ に対しては、 Σ の全近傍 Σ'' ,

$$p_j = \tau - \begin{pmatrix} \lambda_j^0 & 0 \\ 0 & \lambda_j \end{pmatrix} + p_0$$

$$q_j = \tau - \begin{pmatrix} \lambda_j^0 & 0 \\ 0 & \lambda_j \end{pmatrix} + q_0$$

$$p_0, q_0 \in \tilde{L}_{s_0}^0$$

となることに注意すれば、補題 3-1 を得る。尚詳しい証明に関しては S. TARAMA [2] 参照。

参考文献

- [1] W. Matsumoto : On the conditions for the hyperbolicity of systems with double characteristic roots.
(to appear)
- [2] S. Tarama. : Sur le problème de Cauchy pour une classe de systèmes faiblement hyperboliques dans une classe de Gevrey.
(à paraître)
- [3] Y. Ohya : Le problème de Cauchy pour les équations hyperboliques à caractéristiques multiples, Jour. Math. Soc. Japan, 16, 268-286 (1964).
- [4] H. Yamakura : On the Cauchy problem for weakly hyperbolic systems, Publ. R.I.M.S., Kyoto Univ. 12, 493-512 (1976).